

教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	東京医科歯科大学	申請分野(系)	医療系
教育プログラムの名称	看護学国際人育成教育プログラム		
主たる研究科・専攻名	保健衛生学研究科総合保健看護学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 佐々木 明子		

[教育プログラムの概要]

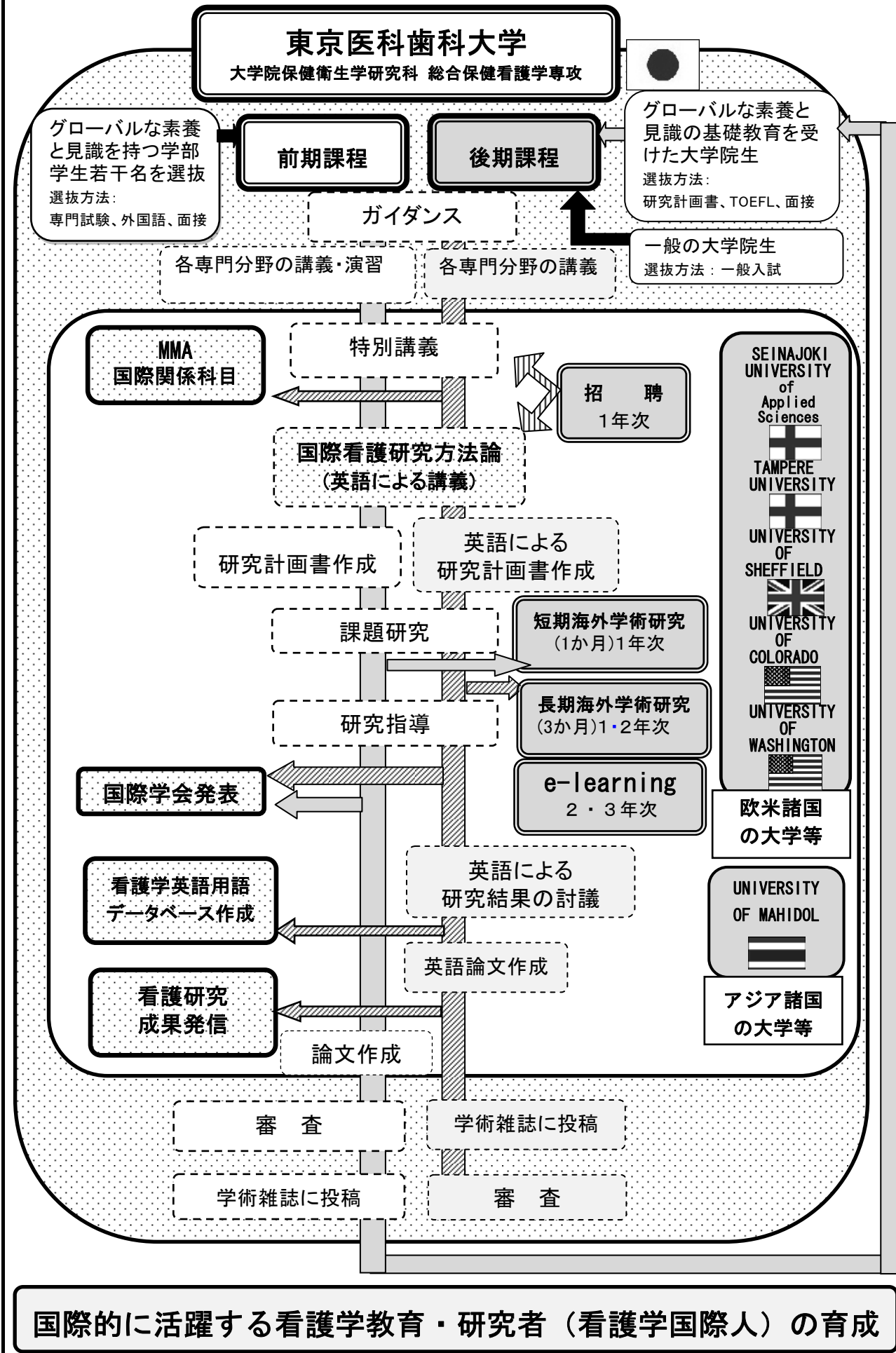
過去十数年の我が国の看護系大学・大学院の急増により、次世代看護職ならびに看護教育・研究職育成の数量的充足は達成しつつある。今後は大学・大学院の質的充足が大きな課題であるが、そのためには次世代教育を担う教育・研究者の育成、すなわち世界に通用する質の高い博士（前期・後期）課程修了者の輩出が、看護界全般の底あげには最も効果的である。

本邦におけるこれまでの看護系大学院教育は、海外留学によって看護学修士・博士号を取得した教育・研究者と、主として我が国の医学・保健学領域で修士・博士号を取得した教育・研究者が、模索しながら作り上げてきた経緯があるが、まだまだ端緒に付いたばかりである。現在までに産出されている看護学修士・博士論文は、我が国の社会・文化的背景も含めた本邦独自の看護ケアの在り方やその成果などを明らかにしているが、特に「質的、量的研究成果を国際的に発信する」、「看護職の立場からの我が国の医療制度改革提言に向けた国際比較研究を実施する」、などを可能にする教育プログラムまでには至っていない。一流の教育・研究者である国際人として新たな看護の在り方の提言を行える、医療行政、大学運営に関わるグローバルな素養と見識を備えた修了生を育成するためには、「アカデミック・トレーニング」が不可欠である。

「アカデミック・トレーニング」とは、狭義では研究助成金獲得や研究技法などを教育する「リサーチ・トレーニング」をベースとしているが、ここでは研究技法や理論にとどまらない、第一線の研究者が国際的に活躍するために備えるべき知識・技術・態度を体系的に教育するプログラムを指す。具体的には、博士（前期）課程でグローバルな素養と見識を持つ学生を選抜し、看護学国際人として将来活動するための心構えや研究環境を整えるために必要な教育を、博士（後期）課程まで継続して行う。さらに、博士（後期）課程入学後には看護学博士号取得と看護学国際人として活躍するための、研究課題への発想や着眼、企画力、交渉力、助成金獲得支援、さらには研究者としてのマナー、研究成果の公表方法を体系的に教育する。また、「アカデミック・スキル」に関する国内外の教育研究成果から、我が国の看護学の独自性を取り入れた効果的なプログラムを構築する。プログラムには英語による国際看護研究方法論の授業、プレゼンテーション、討議や一定期間の国際学術研究、国際共同研究への参画などを含む。特に、博士論文への取り組みは計画書作成段階から英語で行う。本学は、平成17年度から博士（後期）課程教育のコースワークの充実を図り、国内はもとより海外においても指導教員との双方向性をもった対面式、かつ直接論文指導が可能な「遠隔論文指導システム」を開発・設置し、運用している。これらを活用し、さらには5大学を数える海外協定校との連携を強化し、英語による教育に活用する。開発された本プログラムとその有効性が実証されれば、他の看護系大学院での応用・転用が容易となり、ひいては我が国の看護系大学院教育全体の質の向上と国際的発展にも寄与することとなる。我が国の看護学教育・研究者の研究成果は、国内において積み重ねと共有を行ってきたが、研究成果の国際的蓄積や国外への発信には、限界がみられる。国際的に評価される研究は、十分な資質と体系的な教育、そして日頃の研鑽によってこそ、成果が得られる。

我が国の看護学が真に発展するために、本プログラムによる大学院博士（前期・後期）課程教育のさらなる充実、研究者育成とその成果の国内外への発信拠点としての役割を担っていきたい。

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、「国際社会のニーズに応える研究心旺盛で問題解決型思考力を有する高度専門職業人及び世界をリードする本格的な国際的研究者」という、社会のニーズに対応した人材養成目的が明確に掲げられており、それに対応した知識・技能を体系的に身に付けさせる教育課程が編成されている点が評価できる。また、ファカルティ・ディベロップメントについても組織的に推進されるとともに、社会人学生に対する長期履修制度など学生に対する修学上の配慮がなされている点も評価できる。

教育プログラムについては、大学院生の国際化を目指す教育プログラムとなっており、「国際的に活躍する看護学教育・研究者（看護学国際人）」としての能力を身に付けさせるという目的を具現化するため、特に、「アカデミック・トレーニング」の取組が計画されている点は高く評価できる。ただし、海外大学との連携については、欧米諸国の大学だけではなく、アジア・オセアニア地域の大学との連携も進めることが望まれる。